

イスラーム哲学における「個人」の問題

小林 剛

イスラーム哲学との出会い

最初に少し前置きをさせていただきたいと思います。私は哲学科出身で、西洋哲学を最初に勉強しました。特に中世哲学が専門分野で、大学では哲学の授業とともに、キリスト教を教えたりすることが多いのですが、研究を進めていくうちに、西洋のものの考え方を理解するためにはどうしてもイスラーム、あるいはイスラーム世界で展開された哲学を理解しないとだめだという

考えに至りました。

西洋の様々な研究を見ると、どうしてもそここのところを隠したが、あまり出したがらない、「西洋のものは西洋から始まった」と言いたい傾向があるような気がします。それは東洋人である私にとっては非常に不満でした。

私の博士論文のテーマは、中世を代表する哲学者であるトマス・アクィナスの思想でしたが、その師匠、先生に当たるアルベルトゥス・マグヌスという人は、

非常に重要な思想家であるにもかかわらず、西洋では、弟子のトマスと比べるといまいち脚光を浴びていません。その理由の一つには、彼の本の中に、彼の議論の極めて重要な源泉の一つであるイスラーム哲学者たちの議論が豊富に展開されているということがあるのではないかと私は疑っています。

そういう彼の思想が西洋においてはあまり注目されない一方で、弟子のトマスの思想の中では、彼の議論の源泉であるイスラーム哲学者たちの名前はあまり出てきません。さもトマス自身が議論のすべてを初めからつくったかのような形で書かれています。そしてそれが皆さんご承知のとおり、ローマ・カトリックの中心教義を形成していくこととなります。そういう感想がありましたので、私はアルベルトゥス・マグヌスという思想家の研究を通してイスラーム哲学に近づいて来ました。

ですから、最初からイスラーム哲学の専門家だったわけではなく（今も本当の意味での専門家ではありません）、アラビア語を初めから独学で勉強し直すという形で研

究を進めてきました。そうすると、不思議なことに、そういう研究を始めたたんに、いろいろなところから、イスラーム哲学に関して話をしてみないかと声をかけられるようになりました。そこで、いつも必ずこの前置きをして、「私は専門家ではございません」という話をすることにしています。ともあれ、イスラーム哲学に対する興味関心が増大しているということを非常に実感しています。

イスラームを無視して今日の世界を理解していくことは不可能だと思いますが、イスラームがあまりにも日本人である我々と文化的つながりを持たないので、「イスラームというのはどういうものですか、こういうものです」という話を聞いたときに、「ああ、そうですか」で終わってしまうところが少しあるのではないかと思います。それに対して哲学というのは学問の基礎であり、西洋を通して日本にもたっぷり入っていて、大学で学ばれている学問のすべての基礎になっていきます。その哲学を通して、イスラーム思想も西洋の思想も、それから我々日本の思想もある種の共通基盤を持って

いますので、そういう共通基盤を知りたいというニーズが今、日本のあちこちにあるのだなということをしひしと感じています。

ローマ帝国からイスラーム世界へ、西洋へ

私は最近『アリストテレス知性論の系譜——ギリシア・ローマ、イスラーム世界から西欧へ』（粹出版社）という本を書きました。この本は、アリストテレスという古代ギリシアの哲学者が問題にしたことが、ローマ帝国を通じてイスラーム世界で熟成され、それが西洋に、特にアルベルトゥス・マグヌスという人を通して入り、そこで西洋の学問の基礎が築かれたということとをできるだけわかりやすく書いた本です。

皆さんご承知のとおり、今大学で学ばれている学問の中心は西洋由来の学問です。それに大学という教育制度はそもそも非常に西洋に独特な学校制度です。そういう意味でも、大学で学ばれている学問は西洋由来だと言えますが、更はその起源は古代ギリシアにあります。しかし、古代ギリシアで展開された学問がどう

いう経路を通過して西洋に入ったかということはあまり注目されていないと思います。当然、古代ギリシアは西洋ではないということを、まずしっかりと認識しておく必要があるかと思えます。

西洋というのは、早く見積もって9世紀、遅く見積もれば11世紀頃、旧西ローマ帝国の北側に誕生した、正確には西欧と言わなければならない文化圏のことであるというのが歴史家一般の主たる見方であろうかと思えます。それが成立したときには、「学問」と呼べるものは非常に乏しい状況にありました。それはつまり、西洋の学問の中心は後に外から入って来たということを意味します。具体的に言うと、古代ギリシアで発展した学問は、まずローマ帝国に古代ギリシアが征服されたときにローマ帝国の中に広がります。ローマ帝国に広がりましたが、それは古代ギリシア語を通して広まったので、主に古代ギリシア語が話されていたローマ帝国の東側で広まりました。西側はラテン語が共通言語でしたので、古代ギリシア由来の学問はそれほど広まっていなという状況がありました。

そして、ローマ帝国が衰退していく中で西ローマ帝国と東ローマ帝国とに分かれていくのですが、東ローマ帝国は千年以上続き、その中で古代ギリシア由来の学問も温存されます。それに対して西ローマ帝国では、古代ギリシア語が分かる人がますますいなくなる中で、古代ギリシアの学問が廃れていきます。更に西ローマ帝国は、すぐにゲルマン民族が入って来ることによって滅亡します。ゲルマン民族が古代ギリシア・ローマの遺産として受け継いだほぼ唯一のものがキリスト教です。西ローマ帝国跡地に生まれるゲルマンの国々はキリスト教を通して、古代ギリシア・ローマの文化を受け継いでいきます。

ですから、今述べたとおり9世紀から11世紀頃に旧西ローマ帝国の北側で西洋という文化圏が登場してくるのですが、そこにあった古代ギリシア・ローマの文化というのは基本的にはキリスト教だったのです。その中に若干、学問と呼べるようなものが混じっていた程度です。混じっていた一つの理由は、キリスト教の礼拝がラテン語で行われたということです。だから聖

職者たちはラテン語を一生懸命勉強しなければなりませんでした。そのため教会にはラテン語で書かれた文献が残っていました。その中にはキリスト教作家たちが書いたキリスト教文献があったのです。一番権威があったのはアウグスティヌスというラテン教父の著作で、この人はキリスト教徒になる前は哲学教師でしたので、そういった関係でキリスト教の話の中に哲学の話が出てきます。

一方、東ローマ帝国に温存されていた古代ギリシア由来の学問はその後どのような経路を辿って西洋に伝わったか、これが非常に重要です。7世紀になってイスラームという宗教が誕生します。イスラームはキリスト教と違い、百年足らずの間に瞬く間に世界大帝国を築き上げました。キリスト教がローマ帝国に広まるまでには4百年から5百年かかっています。それに対してイスラームは、東はインドの近くまで、西はスペインに至るまでの大帝国を築くのに百年ぐらいで達成してしまいます。ただ、最初の百年はとにかく戦争に明け暮れ、文化に目を向ける余裕はありませんでした。

それが一段落したのがウマイヤ朝という王朝です。この王朝がある程度領土をめいっばい広げ、その次に代わったアッバース朝という王朝で初めて少し落ち着いて文化に目を向けることとなります。このアッバース朝のカリフ（イスラーム世界における王）が、隣にあった元世界帝国、当時はよれよれの状態の東ローマ帝国に目を向け、そこから様々な学問文献を輸入しました。国家プロジェクトとして、カリフたちが、古代ギリシア語で書かれた文献をシリア語やアラビア語に翻訳していくという事業を行いました。非常に大々的に行われ、また非常に正確に何度も推敲を重ねられ、非常によい形でイスラーム世界に古代ギリシア由来の学問が入りました。

ムスリムになるためにはアラビア語ができなければならぬので、非常に広い範囲にわたってアラビア語を理解する人々がいます。古代ギリシア語というのはローマ帝国時代にはある意味でエリートという言葉でイスラーム世界でアラビア語というのは非常に多くの人が読み書きしますから、学問文献がアラビア語の翻

訳で読めるということは、ある意味での学問の大衆化がそこで初めてなされたということでもあると思います。

そして12世紀、日本で言う平安時代末期ぐらいですが、西欧もだんだん落ち着いてきました。ゲルマン民族の大移動がおさまり、落ち着いて農業ができるようになり、生産量が上がリ、人口が増え、都市ができ、暇ができてきます。そして、勉強したいという人が出て来ます。最初は勉強したい人は教会に行きました。そこにしか教えてくれる人がいなかったし、本がなかったからです。しかし教育に関して教会は、人材の面でも教材の面でもやや貧弱でした。

そうしたときに、隣に先進国があり、そこでは学問が大いに発展しているという情報が入ってきます。特にスペインを通して入ってきます。スペインはちょうど戦をしているところなので、ヨーロッパ人とムスリムたちが共存しているような地域であります。そこから情報が入って来て、ヨーロッパ中から有志たちがスペインのトレドという町に集まり、そこで、アラビア

語で書かれた学問文献が教会の用語であるラテン語に翻訳される、そういう運動が起こります。

この翻訳運動は、先ほど述べたイスラーム世界における古代ギリシア語からアラビア語への翻訳という運動よりもはるかに小規模なものでした。国家プロジェクトではなくて有志が行ったもので、訳したい人が訳したいものを訳しました。だから、非常にマイナーな本が訳されたかと思えば、メジャーなものが全然訳されてなかったり、訳がひどかったりしました。ともあれそうやって12世紀末にイスラームから入って来た学問、これが西洋最初の、キリスト教という宗教から独立した本格的な学問でした。ですから、西洋の学問の本格的な誕生はここにあったと言っていると思いません。

アリストテレス哲学と知性単一説

以上のようにして古代ギリシア由来の学問がローマ帝国に広がり、それがイスラーム世界に入りました。その段階では非常に多分野にわたりいろいろな学問が

入りました。しかしイスラーム世界で学ばれた古代ギリシア由来の学問の中心はアリストテレス哲学でした。これにはいろいろな理由が考えられます。一つには、イスラーム世界で最初に学問をリードしたのは、ローマ帝国から異端として追放されたキリスト教徒たち、特にネストリオス派のキリスト教徒たちだったということがあるかもしれません。彼らはギリシア語もシリア語、アラビア語も堪能でした。その彼らの中には医者が多くおり、医学に非常に興味がありました。当時の医学の基本はアリストテレス哲学だったので、それでアリストテレス哲学が研究の中心になった可能性があります。

もう一つには、アリストテレスの先生はプラトンでした。プラトン哲学は古代ギリシア哲学のもう一つの最高峰としてあったのですが、プラトン哲学・プラトン主義哲学の文献には時々古代ギリシア・ローマの神々の名前、話が出てきます。これが、一神教であるイスラームには少々不都合であったかもしれません。

このように、イスラーム世界で学ばれていた学問の

中心はアリストテレス哲学でした。だから、12世紀後半にスペインを通して西洋に入ってきた学問の中心も当然アリストテレス哲学でした。西洋の学問を考えると、その出発点はアリストテレス哲学であったということ、しかもそれはイスラーム哲学のバイアスを通して入ってきたアリストテレス哲学であったということをしつかり認識しなければなりません。これは西洋人があまり言いたがらないことなので、東洋人である我々が言うべきだと思っています。

実は、アリストテレスが書いた「著作」と言えるようなもの、つまり出版されたものは現在一冊も残っていません。ではなぜ我々はアリストテレスの思想を知っているのかというと、恐らく彼が自分の学校で使っていた授業ノート、それを見て彼は講義をしたと思われるものだけが残っているのです。他の本の内容は断片としてしか残っていません。ですから我々が今日「アリストテレス全集」と思っているものは実は全集ではなく、恐らく彼の授業ノートなのです。ですから、大事なことが非常に簡潔な形でしか述べられていません。

非常に深い内容が含まれているのは確かなのですが、それだけでは読んでもよく分からないという特徴があります。

なので、ローマ帝国の時代からアリストテレス哲学研究は注解書、つまり一言一句に解説を付けた本を書く、あるいはそれを片手に研究するというのが基本的な研究スタイルになりました。先述の拙著にも様々な思想家が出てきますが、彼らはすべてアリストテレス全集と呼ばれる授業ノートに注解書を書いた人々です。

西洋が最初に本格的な学問であるアリストテレスを受け取ったときに誰の注解書を読んだかということですが、それは主にイブン・ルシユド（アヴェロエス）という人のものでした。この人は12世紀にスペインで生まれ、この地方で活躍したムスリムの哲学者です（アヴェロエスというのは西洋での呼び名です）。ですから、西洋で最初に確立された学問研究のスタイルは、このイブン・ルシユドの注解書を片手にアリストテレスの本を読むというものでした。

そしてそこで大事件が起こります。それが今日一番

問題としたい点です。アリストテレスの全集の中に『デ・アニマ（魂について）』というタイトルの本があります。これは「心理学」と訳してもよい題名です。心理学の始めとなる本と言ってもいいと思います。この本には心についていろいろなことが書かれています。中でも最後の巻となる第3巻の真ん中辺りに知性について書かれています。拙著の題名も『知性論』で、まさにこの箇所を問題としています。

その箇所を当時の西洋人たちは主にイブン・ルシユドの注解書を読みながら学んだのですが、そこに知性単一説と呼ばれる説が提唱されていました。これは驚くべき説でありまして、簡単に言えば「人類にはたった一つしか知性がない」「我々人間一人ひとりには知性はない」という説です。

この説は、人間社会にとって大変危険な思想であるように思われます。なぜなら、もし全人類に知性が一つしかないならば、人間一人ひとりと動物を区別する基準がありません。これは西洋では危険思想と見なされました。その理由の一つは、今言ったように動物と

は区別される人間の尊厳が失われるからです。もう一つは、行動的に何かその人が悪いことをしたときに、「君は、どうしてそれをやったのか。やったのなら責任を取りなさい」というように、その責任を問う根拠がなくなってしまうということです。その二つが主な理由だと思えます。

実はイブン・ルシユドという人は晩年になってイスラーム世界から追放されます。そしてそれ以降、あれほどイスラーム世界で発展した古代ギリシア由来の学問の研究がみるみる衰退していきます。衰退した理由はいろいろあるうかと思えます。たとえばモンゴル人に攻められ社会が衰退したということもあるでしょう。しかしイブン・ルシユドの「知性単一説」のインパクト、その危険性というものも非常に大きな理由の一つであったのではないかと推察されます。

それ以降古代ギリシア由来の思想というものは、イスラーム世界では、宗教から独立する形を取らず、イスラーム宗教思想の中に溶け込むという形で、主に神秘思想という形で発展していくこととなります。

それ以来ムスリムの人たちにはある種の学問嫌い、学問不信というものが恐らく今日にも続いていて（もちろんここで言う学問とは古代ギリシア由来の学問のことです）、それが西洋とイスラーム世界の対話を難しくしている理由の一つではないかと私は思っています。

「知性単一説」論駁の困難さ

どうしてイブン・ルシユドは知性単一説というような突飛な説を展開したのでしょうか。これは、実は哲学的に言いますと全然突飛ではありません。むしろ「知性単一説」になるほうが当然と言っても過言ではないと思いますし、この「知性単一説」を論破することは実は逆に非常に難しいということを言っておきたいと思います。きょうはあまり哲学の難しい話に踏み込まないように注意したいと思いますが、簡単にその理由をお話ししたいと思います。

私も哲学科を出た人間は、最初に西欧哲学史というものを勉強させられますが、それとともに論理学を、学問の基礎として勉強せよと言われます。この論理学

は古代ギリシアで成立した論理学であります。そこでは次のように教えられます。すなわち、論理が成り立つ一番大事な前提の一つは、概念が一義的だということである、と。

例えば、計算が成り立っているとします。そうすると、そこではいろいろな概念が何らかの記号によって示され、使われています。その概念がもし同じ概念として使われているならば、 X なら X 、 Y なら Y 、何でもいいのですが、それが時間や場所によって変化しては絶対にいけません。計算しているうちに1という数字が示す量が少しずつ減ってきたとか、少しずつ増えたとか、そういうことがあつては計算は決して成り立ちません。あるいは、まったく同じ計算なのに、こちらとこちらの概念で、同じ概念を使っているのに、こちらの計算とこちらの計算とで違った意味を持っているとしたら、もはや同じ計算とは言えません。このように、概念というものの内容は時間空間を超えて同じでなければなりません。これが、論理というものが成立する絶対条件なのです。

このように考えると、自然界の出来事が論理的に理解できるというのは実に不思議なことだと分かります。なぜなら自然界には1秒たりとも同じものはなく、ほんの1ナノミクロンでもずれれば、そこには違う状況があるからです。自然の状況というものには必ず時間空間的差異があるのです。そういったものを論理で捉えるということは、本来、時間空間的差異性に満ちている自然の出来事に時間空間を超えた一性を当てはめるということなのです。これは今日の現代哲学でも大問題とされていまして、科学哲学という分野ではカーブフィッティングという名前で問題とされています。誤差を認め、本当は多様な自然現象をある一つの数値に収斂させてしまう、還元してしまうということがどうして許されるのかというテーマで今日でも議論されています。

この問題に実はすでに古代ギリシア人は気がついていました。プラトンはこの問題を非常に重要な問題として捉えていたと思います。古代ギリシア哲学ではここから更に次のように議論が展開していきます。すな

わち、論理というものが成り立っている場はどこかということを考えます。そこには、概念があり、その概念は時間空間を超えていなければなりません。何ら変化しません。そうすると、その場も時間空間を超えていなければなりません。そういう論理が成り立っている概念がある場所を一般には知性と呼びます。そうすると、知性というものは時間空間を超えているわけですから、この時間空間世界の中にはないのではないかという問題が生じてきます。プラトンはここで「イデア界」というこの世とは別な世界を考えます。

ところがアリストテレスは師匠のプラトンは全然違うことを考えます。アリストテレスはプラトンは全然違う性格の人だったのかもしれない。あるいは彼がマケドニア出身の留学生、つまり外国人だったということもあるかもしれません。彼は非常に現実主義者でありました。彼はまず魂というものを考えます。彼にとって魂とは生物の完成態のことです。時間空間世界の中に生物がたくさんいるわけですが、その生き物は様々な細胞からできています。我々の体もそうで

すが、この細胞、その他、生物が成り立つためのいろいろな部分は、ただ集まっているだけでは生物にはなりません。

人間の体が成り立つために必要なタンパク質やカルシウム、水分がただ集まったからといって、それは人間の体にはなりません。もし成り立つとしたら、死体と人間の生きている体との間に何ら違いはないことになってしまいます。人間の身体が生きている本当の人間の体である限りは、集まってきた構成要素を調整し、調和させて働かせる力が必要です。それをアリストテレスは「完成態」とか「現実態」とかいう名前で呼び、それこそが魂であると考えました。

これは、当時のギリシアとしては非常に画期的な考えでありました。魂というのは墓場で浮いている火の玉みたいに自存的なものと古代ギリシア人は考えていました。しかしアリストテレスはそうではなく、むしろ機能として考えるわけです。いろいろなパーツが、パーツの寄せ集めではなく、パーツが調和して働いている状態、これこそが魂であると考えたわけです。こ

れは、現代人には非常にわかりやすい概念で、例えばコンピュータのソフト・アプリなどのプログラムのようなものです。アリストテレスにとって魂とは言わば、部品が集まってそこにドンとある機械のようなものではなく、その機械全体を調和的に動かす機械の機能、状態のようなものことなのです。

そういう魂が、時間空間世界の中の生物と呼ばれるものにあるというのは誰しも認めるとは思います。問題はアリストテレスが知性というものを考えたときに、知性は魂の一部だと考えるところです。これが大問題で、アリストテレスは一人一人の人間に知性があると考えているように見えます。これは、常識的な考えだと思えます。では、人間のどこにあるのか、それは魂の中にある、魂の一部に知性がある、と考えたわけです。しかし、これは大問題です。今述べたように、知性というのは超時間空間的な場でなければならぬように思われます。ということは、この時間空間的な世界の中にはないものはず。ところが魂というのは徹底的にこの時間空間世界の中にあるわけです。なぜ、

時間空間的世界の中にある魂、生物の完成した状態の中に知性という時間空間を超えていなければならぬものがあるのか。これが、千年以上の間人々を悩ます大問題として取り上げられ続けるのです。そのことを先述の拙著で書きました。

アレクサンドロスという、アリストテレス注解者として歴史に最初に登場するローマ帝国時代の学者は、知性は、人間の脳の知能であるというように考えました。これは、非常に現代人にとってわかりやすい考えです。しかし、これはちよつと考えれば、とたんに批判を招く考えです。先ほど述べたように、概念の一義性、時間と空間を超えずつと全く同一であり続けるような概念というものが、この時間空間的世界の中にずつと止まり続けるということは不可能であるように思われます。脳も当然時間空間の世界の中にある物体です。知性がそういうものの機能であるということはあり得ないという批判を後年招くことになりました。

それに対して、テミステイオスという人、この人はアレクサンドロスの百年ぐらゐ後に、やはりアリスト

テレス注解を書いた人で、アレクサンドロスと同じくローマ帝国の学者ですが、彼は思い切つて知性というものをこの世界の外に押しやつてしまひます。物体から離れ、時間空間世界から離れて存在している実体であると考えます。これを離存実体と呼びます。ここに、イブン・ルシユドが後々唱えることになる知性単一説の萌芽があります。

今述べたことから、知性単一説という説が容易に出てくることは想像に難くないように思われます。つまり、我々個人、ここにいる皆さん一人ひとりに知性があるというためには、どうしても物体としての皆さんの体の時間空間的な差異というものを考慮に入れざるを得ません。しかし知性というものはそもそもそういう時間空間的作用を超えたものでなければ、論理が成り立つ成立条件としての超時間空間性を担保できないのです。これで、今お集りの皆さん一人ひとりに別々な知性があると言ふことがいかに難しいかということをご理解いただけるのではないかと思います。

イスラーム哲学者たちとアルベルトウス

ここから少しイスラーム哲学の話に詳しく入ってみたいと思います。テミステイオスという人の文章を読むと、彼はこの知性単一説の問題にあまり問題を感じていないように思います。非常にのほほんとしています。全然問題を感じていなくて、別にいいじゃないか、といった感じでした。そして、彼によれば、この世界の外にある知性が何もかも知っています。そこには時間はなく、永遠的存在だから何もかも知っているのです。そのような知性が、この時間空間世界の一人ひとりの人間に働きかけていろいろな知性認識を起こす、そう考えています。私はテミステイオスを読んでみて、古代ギリシア・ローマの人々にとつて、一人ひとりの人間に知性があるかどうかということは、あまり問題ではなかったのではないかと、別に、なくてもいい、そういう感覚があったのではないかと思っています。そしてこれは、西洋人には許せない感覚だったのではないかと思います。

知性単一説という考えが問題だという意識が哲学の話題として初めて登場するのはムスリムの哲学者においてであるように思います。最初のイスラーム哲学者はアル＝キンディーであると言われます。ただこの人はあまり独創的な思想家ではないようで、作品もそれほど残っていません。やはり実質的に最初のイスラーム哲学者はファーラービーだと思えます。ファーラービーは後に知性単一説と呼ばれることになる問題を意識し、アレクサンドロスの立場を取ります。ですから、人間の知性というのとはとりあえず人間の体のある一部の機能だと考えています。しかしこれだとすぐに、先述の問題に打ち当たってしまいます。彼は、人間の知性は最初体の一部の機能に過ぎないけれども、世界のいろいろなことを経験して知識が増えていくと、最後にはこの時間空間の世界を超越するのだ、解脱していくという言い方が正しいかどうかわかりませんが、抜け出て行くのだ、そういう方法で理論を展開しようと思いました。ここには東洋思想の影響があったかもしれません。

ただ、この試みは挫折したようです。彼は徹頭徹尾古代ギリシア・ローマ的な理屈だけでいこうとします。論理が通る限り論理で展開しようとはします。ですからここには無理があったようです。今は残っていませんが、彼の晩年の作品ではそういう説は取り下げてしまったようです。人間一人ひとりには、時間空間を超えた視点というものはないのだという立場に収まってしまったようです。

この問題を次に受け取ったのがイブン・シーナーという人です。この人がナンバーワンのイスラーム哲学者者だと言っていると思います。イスラーム哲学者一人だけ代表を挙げると言われたら、このイブン・シーナーという人になると思います。彼は非常に手の込んだ理論を展開します。人間一人ひとりの知性は、時間空間を超えているということをまず言います。しかし、同時にこの知性は人間の体の完成状態、つまり魂であり、それは具体的には例えば感覚能力であったり、栄養摂取能力でもあったりします。そういったものと知性は一体化していると言います。どうしてそんなことが可

能かは問題ですが、とりあえずそう言っていきます。そして、感覚能力によって、つまり目で見たり、耳に聞いたりして感覚データが集められ、そこから脳がイメージを作り上げます。脳でどのようなイメージが作られたかによって、今度は人間の知性よりも上位の知性が関わってきます。上位の知性は、物的な世界、時間空間の世界を超えています。そこから知識がそれぞれの人間の知性に流れ込んでいきます。ただ、皆に同じように知識が流れ込んでいくのではなく、その人がどういうイメージを持っているか、そのイメージに関連した知識だけが流れ込んでくると彼は言います。このような非常に複雑な哲学体系を構築していきます。これは非常に魅力的ですが、しかしちよつとうまくいかない、いろいろな理由でうまくいきません。その辺りの事情は先述の拙著に書きました。

彼は哲学を非常に徹底的にやろうとしています。どこかで神秘主義的な傾向も残っていて、また彼自身そういう側面を持っている人なのだと思います。理屈を飛び越えて宗教体験に走っていく面も持っていたよ

うですので、やはりそういう面が彼の中に非常に色濃く残っていると思います。彼の伝統はそういう神秘的主義的な面で、理屈はとにかくこういうことなんだという理解があるように思います。それがイスラーム世界の神秘的な宗教思想の中にならずと残っていくことになります。それに比して彼の哲学的な面はやがてイスラーム世界では萎んでいきます。

ファーラービーとイブン・シーナーは東方で活躍した人たちです。つまり、イスラーム帝国の首都バグダッド周辺で活躍した人々ですが、イブン・バーツジャとイブン・ルシユドは、西方、つまり今のスペイン、モロッコ周辺で活躍した人々です。この人たちは、あの意味でものすごくさっぱりしています。非常にさっぱりしていて、またある意味で非常に反社会的というか、社会を切って捨てるようなメンタリティーを持っている人たちであると私は思います。

イブン・バーツジャという人は、イブン・ルシユドの報告によれば、恐らく歴史上初めて、一人ひとりの人間には今まで考えられてきたような知性などないの

だということをはっきり言った人だと思います。人間一人ひとりが持っているものはせいぜいイメージ、目から入った、耳から入ったいろいろな感覚データを脳が合成してイメージをつくる、それだけであって、それ以外に知性的なことは何も人間一人ひとりにはないと考えた人です。

彼らによれば、論理というものを本当に理解している知性はやはり世界の外にあつて、それが一人ひとりの人間に働きかけてくるに過ぎない。ですから、考え方としてはテミステイオスと似ています。しかし両者の違いは、テミステイオスは知性単一説に対して問題をあまり感じていませんが、イブン・ルシユドやイブン・バーツジャは非常に感じています。だから、ファーラービーやイブン・シーナーといった東方のムスリムたちは、何とかそれを哲学的に説明しようとして挫折していくのですが、イブン・バーツジャやイブン・ルシユドという西方、今のスペイン、モロッコ周辺のムスリムたちは「だめです、そのことはもう説明できないんです」と、一人ひとりに知性があるということに

対するある種の死刑宣告をむしろ積極的にしていくのです。そして、イブン・ルシュドが最終的に知性単一説をはっきりと主張することになります。

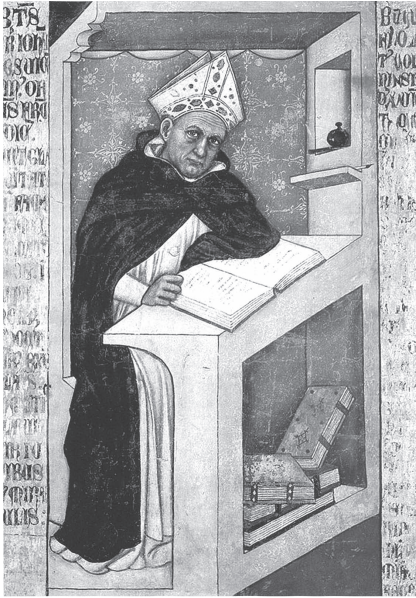
ただ、そのときにイブン・ルシュドはイブン・バーッジャとは少し違って、人間は確かに一人ひとりイメーヅしか持っていないけれども、そのイメージを世界の外にある知性に送ると考えました。だから、時間空間の世界の外に知性があるわけですが、その知性は、特に人間一人ひとりと関わる知性はこの世界のことを知りません。人間一人ひとりがいろいろ見たり聞いたりして、世界のデータを集めてくると、そのデータを、この世界の外にある知性が受け取って初めてこの世界について認識していきます。これは、アリストテレスが言っていることに基づく主張です。すなわち、「知性というのは感覚データを受け取らないと認識しない」という趣旨のことをアリストテレスは言っているのです、イブン・ルシュドはそれに忠実な説を出していくのです。そこが少し違いますが、しかし、基本的には知性単一説で、一人ひとりに知性はないという考えです。

そしてアルベルトゥス・マグヌス、ここで初めて西洋人が登場します。彼は、西洋で初めてアリストテレス、あるいはアリストテレス注解の歴史を全体的に理解した人だと思えます。これだけ全体的にしつかり理解した人は彼が西洋人としては初めてだと思えます。

彼は千年以上にわたるアリストテレス哲学研究の歴史を俯瞰することができたので、ある意味で美味しいところ取りをすることができたのだと思います。そして、非常に巧みな、ちよつとアクロバチックな言いましようか、思想的ウルトラCをやりながら「一人ひとりに知性はあるのだ」ということを主張していきます。それはあまりにも複雑です。拙著の最後の章に出できます。そういう非常にアクロバチックな、かなり無理があると言つてもいいかもしれません、いろいろな人たち、ありとあらゆる人たちの説を換骨奪胎して、「一人ひとりに知性がある」ということを言っていきます。これがあつたので、西洋社会では「知性単一説はクリアできるのだ。では、学問をやるということには危険ではないのだ」という認定がなされて、それ以

降西洋社会では大学という教育機関の中で学問が生き延びたのだと思います。ですから、ここが西洋社会に学問が生き延びるか、生き延びないかの一つの分岐点だったと思います。

アルベルトウス・マグヌスが知性単一説を本当に論破できているのかどうかは分かりませんが、一応「論



アルベルトウス・マグヌス。1223年頃、ドミニコ会に入会。ケルンヤパリで神学を教えた(トンマーゾ・ダ・モデナによるフレスコ画。イタリア・トレヴィーゾのサン・ニコロ教会)

破」できた理由は、それまでの蓄積があったからだと思います。特にイスラームの哲学者たちが、知性単一説という問題を問題として取り上げ、どこが問題で、どこが論破しにくい点なのかということをしげらいついで出してくれたからこそ、彼はそれに反論することができたのです。その意味で、西洋における学問の成立は、むしろイスラーム哲学のお陰であったということを私は声を大にして言いたいと思っています。

イスラームとユダヤ教、キリスト教

拙著を書き終わってずっと不思議に思っていたのは、なぜ知性単一説という問題について、テミスティオスのような古代ギリシア・ローマ人はあまり問題に思わず、ムスリム哲学者たちはこれほどまでに問題視したのかということでした。それはやはりイスラームの影響だと思います。つまり、ムスリムたちはイスラームを信じているので、そのイスラームを信じているムスリムたちにとって、知性が一人ひとりに一つずつないということはやはり許せないし、考えられないことだ

ったのだろうかと思えます。

それはなぜかという点、簡単に言えばイスラームには復活思想がありません。そして終末論があつて、この世の終わりに天国と地獄へ人々は分けられる、つまり、この世には終わりがありません。そして、この世が終わつたとき、それまで生きて死んだすべての人が復活します。そして、復活した人々は最後の審判を受け、天国に入るか、地獄に落ちるかが決められます。それはある種の賞罰です。その人が生前どのように生きたかによって、天国に入るか地獄に入るかが決まるのです。

その際にもし一人ひとりに知性がないとしたらどうなるでしょうか。つまり、知性がないということは自分で考えて理解して行動を制御することができないということですから、動物と同じように自然の成り行き、本能において動かされざるを得ないこととなります。そうやって生まれた行動が審判の対象となつて天国に上げられたり、地獄に落とされたりするのは、ムスリムとして論外だつたのではないのでしょうか。だからこそ、ムスリムである哲学者たちはこの哲学問題を何と

か説明しようとしたのではないかと思えます。

今述べたような、「知性が一人ひとりにならない」ということを論外と考える思想がイスラームにどうやって起こつたのかということを考えたいと思えます。イスラームに対するユダヤ教の影響、これはまず当然あると言つていいでしょう。イスラームを始めたのはムハンマドというアラビア人です。彼はメッカのクライシュ族の一員です。メッカというのは多神教の巡礼地でした。当時のヒジャーズ地方、つまりアラビア半島東部の部族たちはそれぞれ異なる神々を信仰していました。そして、それらの部族が仲良くするために、各部落の神々を合同で祀つた場所、それがメッカです。そしてそのメッカの祭祀を司つていた部族がクライシュ族で、そのクライシュ族の一男子としてムハンマドは生まれました。彼はクライシュ族の宗教伝統として約1カ月前ヒラー山という山に山籠もりをしました。山籠もりの中で彼は神の声を聞きます。「誦^よめ」という有名な呼びかけを聞くのです。

この出来事を彼は非常に不思議に思い、彼の妻であ

るハデーージャに話しました。ハデーージャというのはムハンマドの最初の妻で、非常に年上でムハンマドを守った人物です。このハデーージャの従兄にワラカという人がいて、彼はキリスト教徒でした。彼はムハンマドの話聞いて、「それは神のお告げである」と言いました。そこで初めてムハンマドの宗教体験とユダヤ教とが結び付きます。もちろんムハンマドにおいても、自分呼びかけているのは、あの旧約聖書に出てくる神だという理解が生まれたと思います。

そしてその後彼には断続的にいろいろな啓示が下されます。そこには、『クル・アーン』を読めば分かるっており、『旧約聖書』に出てくる話がたくさん含まれています。有名なところでは、『創世記』で神が粘土をこねて人をつくった話、「ノアの箱舟」の話、アブラハムが神に呼ばれて旅立って行く話、モーゼが海を割ってエジプトを出て行く話などです。旧約聖書に出てくるいろいろな話がムハンマドに直接啓示されたということになっています。

ですから、イスラームにユダヤ教の影響があるとい

うことは間違いありません。もちろんムスリムの人に聞けば、「それは影響ではなく、神から直接啓示されたのだ」と言うでしょう。しかし外部から見れば、それは歴史的・地理的影響も当然考えられなければならぬでしょう。まず一つは、ヒジャーズ地方、アラビア半島東側は地理的に非常にユダヤの地に近い地域です。今のイスラエルと地理的に非常に近い。それから、ユダヤ人というのはいろいろなところに植民しているの、当然アラビア半島にも住んでいます。「新約聖書」の中には有名な聖霊降臨の事件が出てきますが、そこで五旬祭という有名なユダヤ教のお祭りです。世界中からユダヤ人が集まっているという記述があります。そこに様々な地名が出てきますが、アラビアという名前も出てきますので、アラビア半島にユダヤ人がたくさんいても全然おかしくありません。

それから、ムハンマドが世の中で力を示す最初の出来事は、ユダヤ人コミュニティとアラビア人コミュニティの仲裁をするということでした。そこから彼は世の中に登場してくるので、もう彼の周辺にはユダ

ヤ人がたくさんいたと推測されます。そういった意味で、ムハンマドにユダヤ教の知識があったり、その影響を受けて宗教体験を理解したと考えることは全然問題ないと思います。

ただ問題は、ユダヤ教という宗教に今述べたような「一人ひとりに知性がない」ということが認められないというような、個人という考え方があったかどうかということです。つまり、ユダヤ教に個人はあるかという問題ですが、これはなかなか難しい問題です。本来的にはユダヤ教の専門研究者に聞いてみなければなりません。当然、ユダヤ教からキリスト教が出て来るわけですから、キリスト教を生み出す要素がユダヤ教には含まれていると思いますが、しかし、一般にユダヤ教全体を見たときに、ユダヤ教に「個人」という発想は非常に希薄である、あるいはほとんどないと言っているのではないかと思えます。旧約聖書で問題になっているのは、ユダヤ民族がどうなのかということだろうと思えます。

一番典型的な例は、『創世記』で、神が最初にアダム

とイヴを創造しますが、パウロなどの理解では、アダムとイヴは死なない者として造られました。普通我々は、人間というのは死ぬものだと理解しています。しかし、パウロ的に理解されたユダヤ教では、最初に造られた人間は死なない、つまり、人間にとっては死なないのが当然なのです。しかしアダムとイヴがエデンの園で神の教えに背いて「善悪の知識の木」という木から実を取って食べたので、神が怒り、罰として死を与えました。そこから人間の死が始まるという理解です。

ここで面白いことは、アダムとイヴが神の言いつけに背いたので、罰はアダムとイヴだけが受けられ、ばいではないかと我々には思われるということ。つまり、アダムとイヴだけが死ねばいいのではないかと思えますが、そうではなく、アダムとイヴから生まれた子々孫々に至るまで死という罰を受け続けていると理解されるのです。これはある種の連帯責任です。ここでも、罪を犯した個人が問題ではなく、全体が問題、つまり、人類全体が集団で問題になっていると言

っていいと思います。

同じく『創世記』で、今度はアブラハムという人が出てきて、彼は神によって「よし」と認められます。そして、そのアブラハムの子孫からユダヤ人という特定の民族が生まれます。アブラハムが神に「よし」とされ、神はアブラハムに「あなたの子孫を繁栄させる」と約束します。ですからここでもやはりアブラハムの子孫全体が問題なのであって、個々人がどうのという話ではないように思われます。

最後に、ユダヤ教にとって救いとは何かという問題ですが、これは、後にそこから出てくるキリスト教やイスラームとは全然違います。ユダヤ教にとって救いとはメシアの到来です。メシアとは「油注がれた者」という意味で、戴冠された王を意味します。基本的には王です。しかし、ダビデという王が神から与えられたが、その後の王には王にふさわしくない人々がいました。再びダビデのような王が神から与えられ、そして、ユダヤの王国が再び大国の支配から免れ成立すること、これがユダヤ教の救いです。一人ひとりが天国に行く

のか地獄に落ちるかという話では基本的にはないので、ユダヤ教に個人思想の源を見ることは難しかろうと思われまます。

そうすると、やはりイスラームに対するキリスト教の影響ということを考えざるを得ないと思います。先ほど述べたとおり、ムハンマドに対して、自分に啓示を与えているのは唯一の神であるという理解を与えたのはワラカというムハンマドの妻の従兄であり、彼はキリスト教徒でした。ですから、キリスト教徒もユダヤ教徒と同じように、あの当時、ヒジャーズ地方にたくさんいたということは間違いないと思います。中近東地域は、ローマ帝国で異端とされたキリスト教徒たちがたくさんいたということは歴史上の事実です。単性論者よりもネストリオス派のほうが多かったようにです。

そして、ムハンマドの教えもネストリオス派に非常に類似しているように思われます。「ムハンマドが言っている」という言い方はムスリムの方々に怒られるかもしれませんが、ムハンマドが神から受けた啓示の中

には、『クル・アーン』に書かれているように、イエスを神と考える信仰に対する批判が出てきます。イエスはアラビア語ではイーサーですが、『クル・アーン』の記述によれば、イーサーは非常に素晴らしい、神の教えを伝える預言者だが、弟子たちは間違つて彼を神として崇めているのはけしからんという話が『クル・アーン』に出てきます。これはやはりネストリオス派の派であると言えるように思います。ネストリオス派というのは、人間イエスと神であるイエスを区別します。十字架で死んだのは人間イエスであつて、神が受難したわけではない、そういう位置づけです。

さらに最後に言えることは、先にも述べたように、イスラーム帝国が成立し、いよいよ文化を取り入れるというときに、その先頭に立ったのはネストリオス派キリスト教徒でした。アラビア人はまだそれほど教養が高くありませんでした。ネストリオス派たちは、ローマ帝国東側から追い出された人々でしたので、ギリシア語ができました。そして、逃げて来た場所で生き抜くためにシリア語やアラビア語をマスターしたバイリ

ンガルでした。そして、彼らはローマ帝国のいわゆる正統と呼ばれるキリスト教徒たちと常に心の中で論争していた大変なインテリたちでした。だから彼らがまずイスラーム世界の文化の先鞭を切ったのです。

そういう意味でも、キリスト教というものはイスラームに影響を与えていて、そのようなムスリム哲学者たちに個人の自覚、一人ひとりに主体的な知性がないということとは考えられない、そういう信念をもたらしただと思えます。

イスラームとファルサファ（哲学）

しかし、イスラームとキリスト教が一番違う点は、キリスト教が徹頭徹尾ヘレニズム世界で成立したということではないかと思えます。これは、キリスト教というものを考える上で非常に重大かつ不思議な側面だと思えます。イエスという男はユダヤ教徒、ユダヤ人です。彼の弟子たちも全部ユダヤ教徒でありますし、ユダヤ教の文脈の中で起こった出来事を出発点にしています。

ところが、早くもイエスという男の意味について最初に思想と言えるものを提出したパウロは、ギリシア系の街の出身で、ギリシア系の学校に恐らく通っていて、ギリシア語を話すユダヤ人でした。彼の語っている内容自体は徹頭徹尾ユダヤ教的ですが、発想はどこかにやはりギリシア的なものがあると言っていると思います。そしてその後ユダヤ戦争によってユダヤ教が保守化していく中で、キリスト教はユダヤ教徒の中ではもはや広がっていけない、ヘレニズム世界（ギリシア・ローマ世界）で広がっていきかありませんでした。そこで、「福音書」と呼ばれるイエス伝は全てギリシア語で書かれ、信者はギリシア世界でますます増えていきます。その中で、様々な思想の対立があり、様々な論争がなされ、ローマ帝国の国教化プロセスでは、ローマ皇帝主催の公会議が何回か開かれました。そのような過程では徹頭徹尾ギリシア思想の影響を受けてキリスト教は成立していきます。

ですから、キリスト教の場合、根本には徹底的にユダヤ教があるにもかかわらず、その後の成立過程は徹

底的にギリシア的でした。この二面性が非常にキリスト教の特徴的なところです。それに対してイスラームはアラビア半島の東側のほぼ一番南で起こりました。先ほど、ユダヤの地からはそれほど遠くないと述べましたが、ヘレニズム世界でないことは間違いありません。

それから、イエスとムハンマドが一番違うところは宣教期間の長さです。イエスは、諸説ありますが恐らく3年間ほどしか宗教活動を行っていません。ですから、わずか3年間で彼が言ったこと、やったことを後の人は解釈していかなければいけませんでした。しかもそれは大方ヘレニスティックなベースの中で解釈されていきます。それに対してムハンマドの宣教期間は20年ありました。40歳ぐらいのときに啓示を受け、60歳で死んでいますから、彼は約20年宣教したことになります。さらに、戦に次ぐ戦の中で彼自身が指揮を取り、具体的な指示も出しています。

その中で彼は非常に具体的な啓示を受けます。『クル・アーン』にはメッカ啓示とメディーナ啓示の2種類

が出てきます。『クル・アーン』を読んでいくと、順番的には後ろのほうにメッカ啓示が出てきて、前のほうにメディナ啓示が出てきますが、実際の時間は反対です。ムハンマドはメッカで啓示を受け、その後ヤスリブ（後のメディナ）に逃げて行きます。メッカ啓示の特徴は非常に宗教的などころであると言っているでしょう。叫びのような啓示が多くあります。しかしヤスリブに移って行くと、啓示の内容が非常に具体的になります。それはある種必要性があったからではないかと思えます。そこで政治を司り、戦っていかなければならぬわけですから、彼は具体的な指示を神の啓示として出していきます。

彼は『クル・アーン』を朗誦します。つまり歌として歌います。そしてそれを弟子たちに暗唱させます。彼が死んだ後に彼の代理となる、一応正統と呼ばれているカリフたちは、初代のカリフから『クル・アーン』を文書化することを念頭に置いていました。すぐに文書化されたわけではありませんが、3代目になるともう文書化が完成してしまいます。これは、キリスト教

と比べて驚くべき早さです。キリスト教の場合は、最初の福音書はイエスが処刑されたすぐ後に書かれたようですが、最後の文書は恐らく百年近く経ってから（2世紀初頭）書かれています。これらの文書群が聖書として認められるのは、その80%くらいは2世紀終わり頃にはすでに認められていたようですが、全体が正式に認められたという証拠が残っているのは4世紀になります。このようにキリスト教では百年、2百年のスパンで徐々に聖典が出来上がっていきました。それに対してイスラームの場合は、本当に数十年で決定版が出され、それ以外の『クル・アーン』の写本は全部廃棄されました。写本校訂が要らないくらいに出来上がってしまいました。しかもそこには、先ほど述べたように、具体的な指示が書かれています。だから『クル・アーン』だけで一つの学問体系を作り得ました。それがシャリーア、つまりイスラーム法学です。

イスラーム法学の法源には、『クル・アーン』とならんでもう一つ、『ハデース』があります。これはムハンマドや教友たちの言行録です。「ムハンマドがこういう

ことをやっていた」、あるいは「教友たちがこういうことをやっていた」という証言があつて、それも文書化されているので、そういったものを読んだ人たちが話し合つて大体合意が成立します。後は、そこからいろいろなことを推理していくことができます。法律、ある法文があつて、それを解釈すると、大体主流な解釈が出来上がつて、その主流な解釈に従つて、ある個別の事件に適用していくといったことができます。それでシャリーアというものができてしまうというわけです。

このようにしてシャリーアができた後に海外からファルサファ（哲学）が入つて来ます。ですから、イスラームはキリスト教とは全然違う形でギリシア思想と関係性を持つて居るのです。ファルサファが本格的にイスラーム世界に入つて来るのは、先ほど申し上げたとおり10世紀頃からです。そのときにはもうシャリーアはある程度出来上がつて居るので、両者の間でぶつかり合いが起ります。

このようにイスラームにとってファルサファはあく

までも外来思想です。そこでカラームというものができてきます。カラームとは神学のことです。そもそも、隣の東ローマ帝国からファルサファを入れてこようとした一つの動機は、カリフがやはり自分の政治的な立場というものをシャリーアに対して確保しようということでした。カリフは絶対的ではなくシャリーアに縛られています。だからカリフはシャリーアが許す範囲の中で自分の権利をできるだけ拡大するために理論武装をしたい。そこで外国からファルサファを持つて来て、その道具を使って、カラームをつくり、法学者たちに対抗していこうという人がいたのです。

次第にそういう流れでできた学派としてはムータジラ派という学派があります。ムータジラ派というのは御用的な、カリフに有利な議論を展開します。なので、この学派はイスラーム神学の世界では主流派にはなっていないません。結局、いろいろな神学の論争の中で主流になつていくのはアシューアリー派という、今でも主流である学派です。アシューアリー派も哲学の概念や用語を使いますが、基本的には哲学に批判的です。一番

有名なのはアル・ガザリーという人です。アル・ガザリーは哲学の先生でしたが、途中でスーフイーに出会って修行者になり、また戻って来て、今度は哲学の知識を使って哲学を批判していきます。そういう流れが中心になっていきます。ですから、イスラームの基本的な流れはそういうギリシア世界的な学問との出会いと反発と別れ、そういう流れであると思います。

フアラシファ（哲学者たち）と神父たち

イスラーム世界においてムスリムの哲学者たちとはどういう位置づけにあったかと言うと、彼らは基本的に宮廷人です。王様に抱えられている人たちです。そしてその多くが医者でした。王様付の医者です。王様の命を守っているので王様に非常に信用されました。医者をやるだけでなく政治に口出ししたりもしました。先ほど言ったイブン・シーナーは宰相でした。そういう関係で、いい医者であれば知識がありますから、当然ファルサファも知っていて、そういう人たちが信用されて宮廷に雇われました。しかし、彼らの立場は

そのような王の個人的信頼の上に成り立っていましたので、盤石な社会的基盤を持っていませんでした。王がいいと言うからいられるのであって、民衆はむしろ嫌っていたりします。またそれを彼ら自身も肌身で感じていたかもしれません。彼らは非常にエリート意識が高い。俺たちだけが真理を知っていて、民衆は真理を知らない、こういう意識が非常に強かったと思います。

フアラビーにもイブン・シーナーにもそういう考えがあると思いますが、むしろそういう東方の人たちよりも、西方のスペイン生まれのイブン・バールジヤやイブン・ルシュドにもっと強烈なエリート意識があったように思います。彼らに言わせると、民衆が信じているイスラームというのは結局、民衆がわかるように平たい言葉で分かりやすく語ってやっているものに過ぎない。預言者や神学者の役目というのはそういう役目であって、民衆にわかりやすいように説いてやることである。だから彼らが語ることは真理とは違う。真理とはつまり哲学のことであって、それは哲学者し

かわからない。王というのは、そういう状況の中で民衆や預言者、神学者と哲学者をきちつと分けて、哲学者を民衆に対して守る義務がある。そういうことを特にイブン・ルシユドは言っています。

ですから、東方にいたファーラービーやイブン・シーナーなどは、ムスリムとしての自分と哲学者としての自分とを何とか調和させようという意図があったように思います。ただしファーラービーは挫折してしまいます。イブン・シーナーも非常に神秘的な面へと進んでいきます。イブン・バーツジャとイブン・ルシユドの場合は、ムスリムとしての自分と哲学者としての自分は違つて当然ということになります。『クル・アーン』を読んでも、そこに書いてあることは、民衆にわかりやすく書いてあるだけであつて、本当のことであるとは限らない。それに対して哲学はすべて本当のことを述べていると彼らは考えています。だから『クル・アーン』の中に、人々が自分の意思でしたことに従つて天国・地獄へ分けられると書いてあつても、それは民衆に分かりやすいように言っているだけであつて、それ

とは全然違うことが哲学で語られていても構わない。そういう意味でイブン・ルシユドには、知性単一説を積極的に主張していくバックグラウンドがあつたと思います。

とはいえ彼らもムスリムですから、問題意識はしっかりと持っています。イスラームと哲学をどう結びつけていこうかと悩んでいます。しかしそれは最終的には失敗に終わっていきます。しかし彼らはそこでたぐさんの道具立てと言いましようか、いろいろな議論の可能性をふんだんに歴史上に残してくれました。それを、西欧人がかき集め利用して知性単一説を乗り越えていく、それが、西洋哲学の出発点であつたと私は思います。

これは非常に面白いことですが、例えば、イブン・ルシユドには今言ったような、民衆をちよつと小ばかにしたような哲学者のエリート意識丸出しの著作があります。しかし、これは全くラテン語に訳されていません。多分リストには上がつていたと思いますし、アラビア語ができるヨーロッパ人は読んでいたと思いま

すが、あえて全くラテン語訳がありません。

このようなやり方はある意味西洋では成功しました。西洋では哲学者というものは神学者の下に置かれて、キリスト教の体面を保ちながら、むしろ哲学というものは民衆がやっていくものとして、大学という制度を通して民衆に、民衆と言っても比較的上流の人々ですが、広がっていきましましたので、それは一つの制度的成功だったと思います。

さて、先ほどキリスト教はイスラームと違って、徹底的に古代ギリシア世界でキリスト教という思想を形成していったという話をしました。しかしこれもまた非常にねじれています。教父と呼ばれる人たち、初期のキリスト教の指導者たちは、哲学を知っていて、哲学の用語、概念を使うことができます。しかしそれを使って何をしたかという点、主に「キリスト教は哲学と違うのだ」ということを言っていたと思います。特にギリシア教父たちの仕事はそうだったと思います。だから、彼らの文献にはふんだんに哲学的な用語・概念が出てきますが、最終的にはやはり、キリスト教は

哲学ではないものだということが一番言いたいことであつたと思います。

それに比べて、アウグスティヌスは少し事情が異なります。彼はラテン教父です。彼の時代、東側のギリシア語圏で成立したキリスト教思想が西のラテン語圏に輸入されていきます。アウグスティヌスという人は、キリスト教が出来上がった後に出てきた思想家で、本人が哲学の先生だということもあつて初期のころは意外と哲学に肯定的な立場を取っています。ところが、晩年になればなるほど、彼もだんだん反哲学的になつていって、死ぬ間際のころには「哲学なんか要らないのだ」と言う方向に流れていきます。

そのアウグスティヌスを一つの出発点として西洋キリスト教が発展していきますが、ポエティウスという人がアウグスティヌスの後に出てきて、彼が「人格」と訳せるような概念を規定します。ここで初めて人格というものが概念的に問題にできるようになります。この人格という概念は、ラテン語ではペルソナと言いますが、これはもともと人間の人格よりも神の位格、

個性を表す言葉でした。キリスト教の神は一でありかつ三であるとされます。つまり父である神、子である神、聖霊である神というのは、三者だが一者であるとされます。その三者性を表す言葉がペルソナです。もっと平たく言えば、一なる神に個性が三つあるのです。一人の人間には一つの個性しかないわけですが、神の場合には一なる神に三つの個性があるのです。その言葉の意味としてペルソナという言葉が使われたのです。そこから派生的に、人間にも人格があるということになりましたが、あくまでも議論のメインは神のペルソナの話でした。

ですから、いろいろな意味で12世紀の後半にアリストテレス哲学が入るまでは、結局、哲学的用語というのはキリスト教、特に神について語るために使われていたのであって、しかも、それは哲学自体として機能するのではなく、「キリスト教というのはこういうものです」というのが決まっています、それを補う、それと哲学との違いを語るために使われるという状況にあったのです。

ですから、初めて哲学を哲学として、学問を学問として、キリスト教と関係なく語る、そこで、人間とは何か、人格とは何か、個人とは何か、ということが初めて語れるようになったのは、イスラーム世界からアリストテレス哲学が入って来て初めてできるようになったのです。当初は教会側は非常に反発をしまして、13世紀初頭にはアリストテレスの本は禁書でした。大学では読めません。授業でも使えません。しかし皆陰で読み続け、最終的には教会のほうが根負けして、13世紀の何十年か後には大学の教科書になりました。しかし、その後も教会はあの手この手でいろいろな考えを断罪したり、破門にしたりしますが、アリストテレス哲学には勝てませんでした。そういう状況が続いていくことになります。

まとめ

今日はいろいろなことを話しまして、大変に失礼いたしました。今日はまず最初に、私が拙著で取扱いました知性単一説という問題に関して話をしました。そ

して、その知性単一説という、哲学的には出てこざるを得ない問題に対する問題意識が古代ギリシア人、ローマ人と、ムスリムとで非常に違うということもお話ししました。それは恐らく、イスラームに対するキリスト教の影響があるであろうということでした。この影響は、直接ムスリムたちを動かしたというよりも、むしろ「イスラーム」と「哲学」を彼らが調和させようとし、挫折し、断念していくという経緯を引き起こしたという形で現れました。しかし、その中でも問題意識が非常にあつて、その過程で彼らが出してくれた様々な議論の可能性を養分として西洋人は後から知性単一説を論破していったということでありました。

ですから、知性単一説を論破できたからこそ西洋には古代ギリシア由来の学問というものが残ったのであって、今日西洋において古代ギリシア由来の学問が生き残っているのは、ある意味ではイスラームの哲学者たちがムスリムとして古代ギリシア由来の学問と格闘してくれたおかげである、西洋人はその財産の上に乗っているのだと思います。そういうことをヨーロッパ

人は言いたがらないので、ヨーロッパ人ではない我々はそれを主張していきたい、それを忘れない、ということも考えています。

(こばやし ごう／明治学院大学講師)

※2014年4月22日に行われました。